

歴史と文化

李栗谷の安保論とその教訓

Lessons Learnt from Yul-Gok Lee's
Theory of Security

金 裕赫*

1. 李栗谷はどういう人間か

栗谷の姓は李であり彼の貫郷は徳水（地名）である。貫郷とは先祖が立身揚名して有名になり、また、家門の名誉を振り上げはじめた居住地であるばかりではなく、国家のため主に務めたところでもある。

それから栗谷の名は珥である。彼の号は栗谷、字は叔獻であり諡号は文成公である。韓国においては昔から本名以外に誰でも気兼ねせずに使うための号とか字、または諡号などがある。号は日本の場合にも一般的に使われているように本名の代わりに使う文名（筆名）もある。字は韓国においても近来には殆ど使っていないが、昔は人の名を大事に考え、結婚した後で本名の代わりに呼ばれた代名であった。そして諡号は帝王とか卿相（職位の高い大臣等）またはすぐれた学者が亡くなつた後で、彼の生前の功德を讃えて國より贈った名前である。諡号を与える時には必ずなぜそのような諡号を贈るかに対して解義の文句が付記される。

栗谷は学問的にもすぐれた東洋的な大学者ばかりではなく、政治人としても的確な事理判断力に基づいて国家発展に関する出衆的な政策を創り出した方である。そういうわけで國より贈った彼の



図1 栗谷影幀 金殷鎬画（1966年）江陵鳥竹軒所蔵

*韓国ソウル市、檀国大学教授、同中央図書館長

謚号には次の文句が付記されている。

即ち道徳を宣揚し学問的にも幅広く貢献したところ、これを「文」で表す（道徳博聞曰文）。また国民生活の安定化に寄与しながら政治を明らかにしたところ、これを「成」で表す（安民立政曰成）と解義されている。

それから彼の両親に関して調べてみると、父は李元秀という方で、韓国で伝統的にいわれている君子らしいところがあり謙徳を備えている高位官職者であった。それから彼の母は申氏であるが、韓国において「母の像」としては第一番にかぞえられる賢母良妻であるばかりではなく、経書に能通し、また詩文とか書画においても誰も追いつけぬほどすぐれた方である。彼女の号は師任堂である。

現在にも韓国においては毎年全国的に賢母良妻であるすぐれた母を選び出して「申師任堂の賞」を与えているが、それほど栗谷の母である申氏（師任堂）は有名である。

栗谷は1536年12月26日、現在の江原道江陵地方に生まれたが、彼に対しては胎夢に関する物語がある。

一般的には孕胎^{ようたい}10カ月目になれば赤子が生まれるが、栗谷は12カ月を過ぎた後に生まれた。彼の母親の胎夢には、東海の神女が玉童子を懷中に入れ込んでくれたばかりではなく、解産の月である或る夜の夢には、大きな黒龍が大海より飛び出て申氏の寝室にはいって来たのである。その故に栗谷を生んだはじめ頃には彼の名（兒名）を「見龍」（黒龍を見て生んだという意味）と呼んだこともある。

また或る夜の夢には一人の老人が現れ栗谷を指して東国大儒が生まれたといいながらその名は「玉辺耳」であると教えてくれた後に消えたこともある。

これは「玉の辺に耳がある」という意味なので、栗谷は夢の中の教えに基づいて「耳」と命名されたのである。

韓国人の場合には結婚した婦人が妊娠する際に殆ど例外なくシンボル的な夢を見るが、その夢が子供に関する夢だとして、それを胎夢といわれている。形体の大きな動物とか巨木などは男子を生む胎夢であり、花とか蝶などのようにこまかいものを夢の中で見れば、それは女子を生む胎夢で

あるといわれている。特に龍とか鳳、麟、亀などの夢は偉大なる人物を生む胎夢であると昔から伝えている。それから鶴とか鷹などの夢は学者または將軍を生む胎夢であるといわれている。

言い換えれば龍は鱗虫の長であり、鳳は羽虫の長であり、麟は毛虫の長であり、亀は甲虫の長であるからだろう（虫は動物を意味する、龍鳳麟亀を四靈と言う）。

栗谷は4名の兄弟の中で3番目の息子であるが、幼い時から非常に賢いので僅か8歳で世中の人に驚かすほどの名詩を作ったこともある。彼の八歳詩を紹介すると次の通りである。

林亭秋已晚（林亭に秋すでに暮れて楓が濃ると）

驥客意無窮（風流を楽しむ方たちの詩想は限りなく動く）

遠水連天碧（遠く流れゆく水は空に連かれ共に青い）

霜楓向日紅（霜に霑れた楓葉は日光に向かって色赤くなる）

山吐孤輪月（山はただ一つの真円い月を吐き出すのに）

江含萬里風（清江はどこから吹いて来るかも知れない風を含んで波を起こす）

塞鴻何處法（遠山を越えて飛んでゆく雁陣はどこにゆくのだろうか？）

聲斷暮雲中（その鳴き聲は日暮れの雲の中に消えてゆく）

栗谷の場合、16歳の時に母親が亡くなり、それから10年後の26歳の時には父親が亡くなった。

李退渓とは35年の年令差があるが、李退渓は生まれて7カ月目に父親が亡くなり、37歳の時にはまた母親が亡くなつて李退渓は七字と縁がないと言えば栗谷は六字と縁がないようだ。

栗谷は母親が亡くなつて3年後、金剛山（江原道北方に位置している）に入って1年間仏教を研究したこともある。また栗谷は23歳の時有名な学者である李退渓を拝訪する際、次の内容の詩を書き上げた。

小子求聞道（私、先生に進拝して学問の道を聞きもとめたい）

非偷半日間（半日以上の時間を、お邪魔致しません）

はじめて会った李退渓は、後で栗谷に関する一言を残した「後生可畏」の言葉がそれである。即ち後輩の中には恐れるほど賢いものがあるということである。

栗谷は13歳の時から、現在の表現でいえば国家より施行する考試に合格し始め29歳の時まで9回応試して、9回全部一番の成績で合格したのである。

そういうわけで彼の別名を九度壯元公（九度は9回、壯元は一番成績の合格を意味する）といわれているが、韓国人の場合昔から今まで栗谷のように国家考試で9回とも例外なく一番の成績を取った者は一人もいない。

栗谷は既に述べたように学問にもすぐれているばかりではなく、国防長官（兵曹判書）として務めながら国基を強固にすることに関して数えられないほど多くの方案（上疏文）を書き出したがその中でも豊臣秀吉の征韓論に関してはより早くからその徵候を判断して、はや“文禄の役”の10年前に豊臣秀吉の征韓に対備せねばいけないとして、その自衛方法に関して詳しく述べたことは非常に有名な彼（48歳の時）の物語の一つである。

栗谷は豊臣秀吉の征韓9年前に亡くなつたが、彼は殞命しながらも「民力を養い將帥と智略の有る人材を集め訓練して敵を察べみて国境を固めねばならない」と警告したのである。

彼は49歳を一生として1584年1月26日に亡く

なつたが、その前夜、彼の奥様である盧氏夫人の夢に一匹の黒龍が寝室より空に向かって飛び上がつたと伝えている。

とにかく栗谷は、韓国歴史において消すことのできない偉人であり、東洋社会においてもゆびおりかぞえられる巨儒中の一人である。日本社会においても古くから広く知られて、幾つかの大学にて退票研究（李退渓と李栗谷）が早くから成されている。

そういうわけで、今回は李珥に関する内容を持って、韓日間文化の交流ないし影響を与えたことに対して調べてみたい。

2. 栗谷と日本との関係 一安保面一

栗谷は、30歳の頃から官僚として務めはじめたが、48歳まで（49歳になる1584年1月26日逝去）の約18年間にわたって書き述べた書物は非常に多いが、その中でも政治問題に関係しているのが多い。

特に、社会的な悪習とか、政治人または官僚達の改めて正さねばならぬ弊習などに関する政策的なアイデアをたくさん提案してきた。

勿論栗谷は兵曹判書（国防長官）として国防責任者であるからそうだとも思われるが、彼は一般国民の民生問題とか社会教育を通じて美風と良俗をいかに振作してゆこうかとの問題をより多く取



図2 現行通用中紙幣の五千 Won 札、写真は李栗谷の像

り扱かったのである。その中でも政治問題に関して50回以上の上疏文を上げたがほとんどが名文であり善策であったわけで、現在においても研究資料として広く応用されている。

彼はまた社会的な問題に関しても地域社会の振興と共に化民成俗のための住民活動として、郷約（住民自治運動の一例）を至る地域にて実行してきたのである。そればかりではなく、栗谷は1583年（48歳）2月には、時務六條方略といわれている有名な“保国安民の政策論”を開陳したが、その主なる内容は次のようにある。

第一は、徳望と能力のある人材に重責を委ねる
(任賢能)

第二は、軍力と共に民力を養う（養軍民）

第三は、国庫の余裕を図り以って国利民福のための支出を充実する（足財用）

第四は、国境線の守りを強固にする（固藩屏）

第五は、戦争用の軍馬などを備え整える
(備戰馬)

第六は、国民教育と風俗醇化に注力して有事の場合、国民の自らの愛国心が噴出できるようその道を明らかにする
(明教化)

ことである。

その時代の殆どの大臣達は、平和的な社会風土の中に暮している国民達に、緊張な内容の政策論を展開して民心を動搖させるのはかえってよくないばかりではなく、それは聖旨に従う道ではないという理屈で受け入れられなかつたのである。

誰よりもすぐれた見方で国際情勢を調べてきた栗谷は、特にとなりの日本からの征韓挑発徵候が現れてくることを予測している立場であった。その故に栗谷は、機会あれば国防問題に対している様々な予備対策案を提案したのである。

にもかかわらず、朝廷重臣には関心のないことであり、各々の派勢強化に心を取られている他の人には、かえってうるさい提案でもあったのである。なぜかといえば、栗谷の提案は皆な妥当性があるばかりではなく冷静的に考えてみれば説得力もある内容だからである。

このような朝廷の雰囲気に対して不満を感じていた栗谷は遂に王様が同席する経筵にて十万の兵力を養成するという内容の、いわゆる「養兵十萬論」を主張するに至つたのである。

栗谷は、その経筵でそれに関する提案説明を詳しく説明申し上げたのである。即ち、現在我が国の國勢は振作されていない。もし、このままで過ぎると10年以内に外勢による戦禍のため、國家の事情は土作りの瓦が水の中で解けるような、厳しい災禍に当たるかも知れない。ですから、いそいで今からでも十万の兵力を養成しなければならないという要旨であった。

栗谷の「養兵十萬論」には、次の内容の意味が含まれている。

第一は、10年教化である。10年間にわたって国民精神教育とか、農閑期を利用する動員訓練などを実施して民力をより強く養うことである。一般国民に國を守るべき義務感を自覚的に持たせれば、国民团结の可能性はより高くなるばかりではなく、献身的に各々の責任のなすべき道をはっきりさせることができる。

第二は、10年間にわたる養兵である。10年間続いて兵力を養えば、有事の場合動員可能な人力はずっと増える。例えば、一定期間中軍兵として務めた後には除隊されて故郷に帰る。このように入隊して除隊する人力循環過程で十万という一定数の兵力は常勤兵力になり、期間中に除隊された人力は予備兵力として益々増えてゆく。そうなると、軍事訓練を修得した戦闘要員としての兵力総員は、ずっと増えて国家自衛力は最も強化されるという論理である。

第三は、自衛力維持のための兵力定員は十万であることで、なぜ十万かといえば、その時代の韓国は、全国の行政区画が八道に分けられていた。また、韓国は半島であり三面が海に沿っているわけで、地域単位的な自衛の用兵戦術が必要であった。栗谷はそのような地政的な条件を勘案して、各道当たり一万名ずつを配置し、残りの二万名は都（漢城）を守る兵力として配置する計画であった。いわゆる首都警備兵力である。

栗谷は、そのような構想を持って将来に起ることも知れないとだと、自分なりの確信に基づいて、國を守り民を護る道を訴えたのであった。

その時、一部の大臣達は栗谷の真意を知っていたけれども、政派所属人としての立場から抜け出しができず、他の者は皆な一口で、「栗谷の提案は現在の情勢に照らして見る時、緊要ではない」として一蹴してしまつたのである。

その理由は簡単である。即ち、なんの故もないのに兵力を養うことは、かえって戦禍を養うことになるということであった（無故養兵、養禍）。翌年に、栗谷は49歳を一生として亡くなった。その年から9年目に当たる1592年にいわゆる壬辰倭乱（文禄の役）が起こった。

その時、豊臣秀吉は30万名の大兵力を出兵させて韓国を攻めて来たのである。

「李舜臣と秀吉」を書いた片野次雄は、彼の著書で次のように述べている。

——秀吉は「朝鮮に出兵して、全土を平定し、さらに明（中国）へ進んでおおくの国々を領有したい。……九州の名護屋に築城したところより、第一軍1万8千人、第二軍2万8百人、第三軍1万2千人、第四軍1万5千人、第五軍2万4千7百人、第六軍1万5千7百人、第七軍3万人、第八軍1万人、第九軍1万1千5百人、都合15万7千7百人を始め、その外、動員された兵力と9千450人の水軍を合わせて30万7千人の日本軍が出征された」と詳しく書いている。

これに対して、当時韓国の官軍は僅か5万人くらいであったので至る処で敗走したのである。

10年前、栗谷が予言したように全国土は豊臣秀吉の軍兵によって完全に焦土化されたばかりではなく、数えられないほどの人口がこの乱によって殺され、約7年間は文字通り土崩瓦解そのままであった。

多くの大臣達は国運が殆ど傾いている際に、10年前の栗谷の予言は正しかったと話しながら後悔したけれども、仕方がなかったのである。

栗谷は、誰よりも日本を詳しく調べていたらしい。なぜかといえば、日本の文化の発達過程とか、または新羅時代から当時に至るまでの韓日間の相互関係を歴史的に分析しているばかりではなく、日本の国内の情勢変化の趨勢を自分なりに正確に判断していたからである。

その後の事であるが、日本において、李退渓と李栗谷に対しては学問的にもよく知られている。それ故に、日本においては「退栗研究」を通じて韓国を知る。また中国と韓国との文化交流関係をより深く知ることになっている。戦前には日本の或る大学において、栗谷の名著「擊蒙要訣」を漢文教材として採択したこともあるのだと、その時期の日本遊学生達は伝えている。

「擊蒙要訣」は皆なで十章になっている。まずここで栗谷の教えを吟味してみると、彼は「人間がこの世に生まれて学問を修得しなければ人間となれない。いわゆる学問とは別の物ではない。人の日常生活に通じる動静の進行過程において、事物に従って行うべき当たり前前の事を誠に遂行するそのものだ」と説明している。「もし人間が学問を修得しないままに生存すると、心地が茅塞になり、また識見が薄昧になるからである」と言いながら「読書と窮理に基づいて、必ず人間の行うべき当たり前前の道を明らかにしなければ中庸を実行することができない」と教えている。

第一章の立志論では、人の顔はなおすことができないけれども、志をはっきり立てておけば、愚かなものも知慧ある者に変化させることができるといいながら、それは人性の本性こそ、古今に通じて異なるところがないからであると説明している。

第二章の革舊習論においては、例えば人間はなまけ者になると威儀を失うことになり、流行に落ち入ると奢侈のため誠実性を失うことになる。そういうわけで、志を固くすべきであり、行動を篤実にしなければ、従来のよくなき舊（旧）習を改変してゆくことができないと述べている。

第三章の持身論では、いわゆる「克己」をいかに勉強するかに対して述べている。「己」とは天理と合わないことを言う。もし、心から好色、好利、好名誉、好仕宦、好安逸、好宴樂、好珍玩など即ち、純心を取られていてはいけない。常に理を以って事物に應（応）じる。誠を以って理を探す（以理應事、以誠窮理）。敬に基づいて人間なる根本を立て、理に基づいて善を明らかにする、真剣な姿でその実を行う（居敬以立其本、窮理以明乎善、力行以践其實）。この三つの事は「終身事業」であると述べている。

第四章の読書論では、「人道は窮理を前提にする、窮理は読書を前提にする（人道莫先乎窮理、窮理莫先乎讀書）と教えながら本を読む時には、必ず行うべき道を明らかにしなければならない」という。もし、読むだけの読書とか実践を伴わない読書は、何の益も有り得ないと述べている。

第五章の事親論、第六章の喪制論、第七章の祭禮論では孝心に基づいて誠を尽くすべきだと述べている。

第八章の居家論では、家をいかに治めるべきかに関して次のように述べている。1)礼を遵守することによって家を治める。2)衣、食、住を始め、吉凶などの宴会または祭礼は品節があり儉約に基づく。3)日常生活において奢華を禁止する。4)家族教化に努力する。5)親族間の和睦を図る。などがその主要な実行徳目になっている。家計はたとえ貧しいけれども、その貧しい暮らしのための心配はしない、かえっていくべき道より離脱されていないかに関して、注意を傾けるべきだと教えていた（憂道、不當憂貧）。

第九章の接人論では、1)人と共に交わる時には和と敬に基づいて処身しなければいけない。2)友人を選ぶ時には必ず学問を好み善を行なうことに志ある者でなければいけない。3)郷里の住民の中で善行に務めるひとに対しては常に親切に近づくことを忘れてはいけない。4)もし他の人が我に対しても毀謗の悪口を取れば必ず自ら反省することにまず注意を傾けるべきだ。などの徳目を主に述べている。

それから最後に、第十章の處世論においては次の内容に関して主に述べている。1)官職に務める

のは自分の出世のためではなく、他人のために尽くすという心持しが主要である（仕者為人非為己也）。2)公職に務める契機が親のお蔭に基づいてはいけない（仕者多為父母之望、門戸之計）。3)人は自ら尽くすべき職分に基づいて学問を成さねばならない。4)名誉指向的な功徳のため、本の志を奪わないように努力すること（不患妨功、惟患奪志）。5)大部分の人は官職に就任する前には、その就任のために急ぐが、一段就任した後にはその職位を失わるために焦躁する傾向がある。そうなると本心を守ってゆくことは期待できない（人於未仕時唯仕是急、既仕後又恐失之、如是汨没喪其本心者多矣）。6)職位の高い者の場合であればもっともっと行道に注力せねばならない、もしその道を行なう自信なければ自ら退くべきだと教えている。

栗谷の「擊蒙要訣」がもつ主なる内容を簡単に紹介したのに過ぎないが、彼は李退渓と共に双峰を形成する大学者であるばかりではなく、二人共に韓日文化流通関係において最も多い物語を含んでいる方である。

3. 栗谷が残した主なる教訓

栗谷は既に述べたように、学問にもすぐれている大学者であり、政治人でありまた眞実な愛国者である。彼の学問的哲学とか政治思想の断面に基づいてみても十分に知られることであるが、彼は常に社会的な弊習をいかにして直すかに対して、いろいろな匡正論を展開してきた。

彼の「経国濟民論」に含まれている教えに基づいて、その価値観の諸侧面を調べてみると、現在の我等に与えてくれる教訓は非常に多いと思われる。

第一は、彼の官職觀である。彼の考えによれば、官職とは雇傭の機会を与えるためではなく、国事をよりよく成就してゆくため、設官分職するのだと言っている。これは、人のために設官する、いわゆる「為人設官」の弊害を防ぐための主張であったのではないかと思われる。「為人設官」の弊害が容認される場合には國力は弱くなる。しかし「設官分職」してそれに合う人材を適材適所の原則に基づいて人々が管理されると、各々の誠実を尽くす社会氣風が宣揚され国家社会は振興できると考

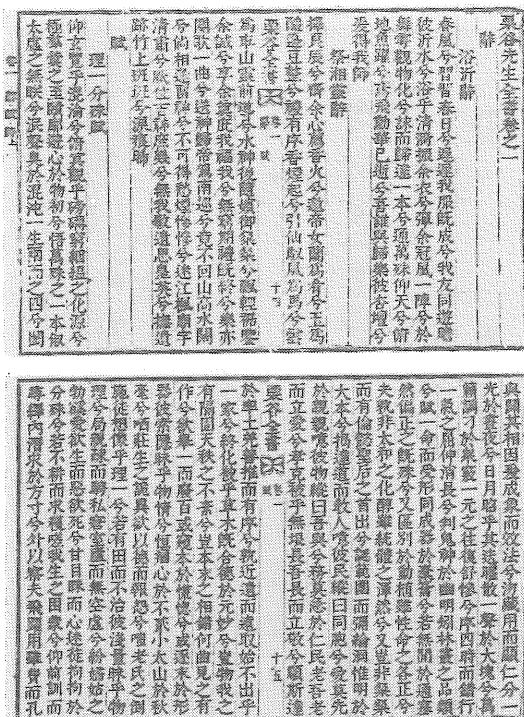


図3 栗谷全書（はじめの部分）

えているのが彼の官職観である。

第二は、彼の状況観である。社会的な状況は随時変化する。政治の機能はその社会変動を順機能的に発展させるためコントロールするところにあり、倫理の役割はその変動が人間化指向的に整理されるよう進行軌道を提供するところにある。政治の主体も人間であり倫理の主体も人間である。従って状況をいかに管理するかも人間にある。人間がいくべき道がなにかに対してその定義をはっきりするためには、レベル高い教養と共に合理的な判断力を培養しなければならない。そのための努力が即ち自己完成の道なのであると常に話している。

第三は、彼の自己管理観である。人間は誰の場合においても主観的な存在なのである。ですから他を責める立場は厳しいけれども自身を責めることは殆どない。その故に、人間はいつでも欲心より自身を解放させる勇気が弱い。従って自分の誤りがあるのにも拘わらず、退職せずに寛容の恩を与えてもらおうとする。ここよりひとは、克己力を失い人格が崩れはじめるのである。栗谷は官職に留るよりは、より賢い人材に譲与する機会がいつかに対し常に深く考えていたのである。

第四は彼の未来観である。既に述べたことのある“文禄の役”が起こる10年前に適正な予言をしたこともあるが、それ以外にも栗谷に関する未来予測の物語はたくさんある。彼は神ではない。普通の人間に過ぎない。しかし、彼は何事でも原理的な、始源がなにかに対して真剣に探究し、また探究した結果に対してそれを論理的に推理してそれに関する客観的な妥当性を求めるのに、非凡的な努力を傾注する彼なりの特性を持っていた。

第五は、彼の自強促進観である。安全保障は社会安定なしに成されない。社会は民生の場である。民生は国民一人一人の実地生活なのである。昔から言っているが、君は民を天と信じ、民は食を天と信じる（君、以民為天。民、以食為天）。そういうわけで、民なしに君なし、また食なしに民あり得ないのである。民を信頼できねば国もまた立てられない。各々の民が自強になれば国は自動的に強国になる。だから、政治の本は養民にあるのだと主張する栗谷の自強促進観がなにを意味するのかを知ることができる。

第六は、彼の報国観である。栗谷は殞命する最

後の瞬間においても、国家の将来に関して遺言を残しながら逝去したのである。国内情勢も長期間にわたって戦争とか外患のない、平和を楽しんできた惰性に落ち入り、安保意識は殆どなかったばかりではなく、海外事情にも明るくなかったその時代を、いかにすれば民と共に報國の道を尽くすかが彼の忠誠心であった。

だいたい以上の六個面において栗谷の価値観の輪郭を診断してみたが、彼の業績は歴史的にも永遠に輝くだろう。李退渓は学問に基づいて國のため尽くしたといえば、李栗谷は学問を基盤にする政策論をもって、保国安民のため尽くしたということができる。

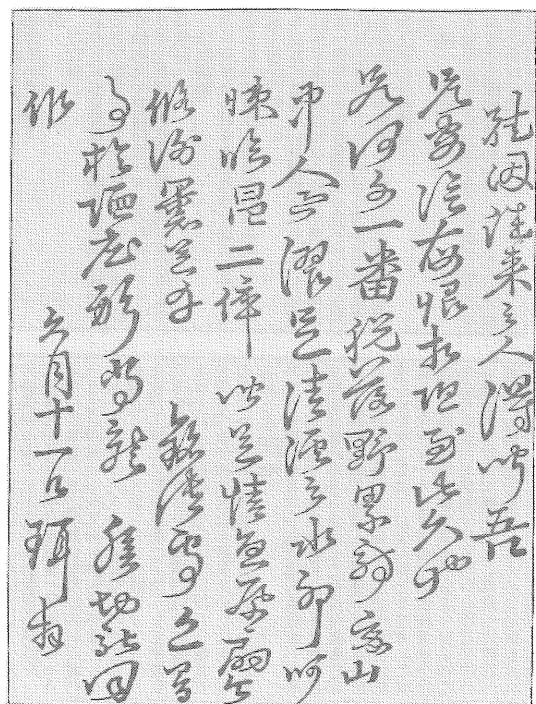


図4 栗谷の自筆